

ピイピヤラ物語

戸川幸夫



ホリデー・フィクション26

ピィヒャラ物語

昭和46年10月10日 初版発行



著 者 戸 川 幸 夫

Y. TOGAWA ©1971

発行者 増 田 義 彦

発 行 所 株式 実業之日本社

東京都中央区銀座1-3-9 電話(562)4311 〒104 振替東京 326

関西支局 大阪市北区真砂町 53 書協ビル内 電話・大阪(363)1706

印刷 大日本印刷 製本 共文堂

丁の場合は本社でお取り替えいたします。  
1261-3214

Printed in Japan

# ピイヒヤラ物語

戸川幸夫







ピ  
イ  
ヒ  
ヤ  
ラ  
物  
語  
  
目  
次



|     |            |     |
|-----|------------|-----|
| 文平、 | 侍志願の事      | 6   |
| 文平、 | ストにまきこまれる事 | 16  |
| 文平、 | 楽隊となる事     | 26  |
| 文平、 | 出征の事       | 38  |
| 文平、 | 白熊をかぶる事    | 49  |
| 文平、 | 敵前上陸の事     | 58  |
| 文平、 | 蛤御門の守護につく事 | 68  |
| 文平、 | 斥候に出る事     | 77  |
| 文平、 | 女官を担ぐ事     | 87  |
| 文平、 | 初陣の事       | 99  |
| 文平、 | 遺言を聞く事     | 109 |
| 文平、 | 大阪城一番乗りの事  | 119 |



|     |                   |     |
|-----|-------------------|-----|
| 文平、 | 愁嘆の事……………         | 130 |
| 文平、 | 江戸に入る事……………       | 140 |
| 文平、 | 直侍に脅かされる事……………    | 150 |
| 文平、 | 一難去ってまた一難の事……………  | 161 |
| 文平、 | 彰義隊本部に連行される事…………… | 171 |
| 文平、 | 文治郎再会の事……………      | 181 |
| 文平、 | 相沢富士郎と闘う事……………    | 192 |
| 文平、 | 敵に情をかける事……………     | 202 |
| 文平、 | 奥州へ下る事……………       | 215 |
| 文平、 | 会津に攻め入る事……………     | 226 |
| 文平、 | なおも進軍の事……………      | 240 |



## 文平、侍志願の事

春であつた。

菜の花が舞い出したかと思うほどにまっ黄色な蝶が二ひき、恋に狂いながら文平の鼻の先で、ひらひら、ひらひらと踊っている。

いくら文平の鼻が大きいからといっても鼻を花と間違えたわけでもなからうが、なかなかしつこい。

空は青空で、白い雲がふんわりと浮いていた。

風は少しある。だが暖かい春風で、少々肥料くさいのが気になるが、もともと文平は百姓なんだから、そんなことはいささかも気にならない。

そこは土手であつた。右手——つまり文平が寝こんでいる足の方からいえば投げだされている左手の側だが——は川で、巾二間ほどの美しい水が流れている左手——つまり文平からいえば右手のある方という、ややこしい表現になるが——は畑で、菜の花ざかりで

あつた。

土手の傾斜はゆるく、タンポポやレンゲやスマイレが絨緞をしきつめたようであつた。

文平は土手の中ほどに仰向きになっていた。

頭の上の桜の枝から、絶えずはらはらと花が降り注いでいた。

遠くの森は春がすみじみにぼやけて、なんともいえない風景である。

風流人なれば、腰に瓢などをさげて、

「青空を……つかまんとする土筆かな……」

とか、なんとか下手な句をひねり出そうとするところだろうが、文平にはそんな風流気は露ほどもない。

瓢のかわりに、さっき同じ村のお島坊が置いてくれた土瓶と湯呑みが枕もとにそのままになっているだけだ。

文平は右手を伸ばして、指先にさわったレンゲ草を一本ぬくと口にくわえた。

ほのかに甘酸っぱい香りが口の中にひろがった。

春だというのに……そしてまだ若いというのに文平は実につまらなそうな顔をしていた。

雲雀も歌っていた。文平は大きな目をあけて大空を



ながめているが、雲雀や蝶を見ているわけでもなかった。

「雲になりたい」

ぽつりと独り言をいった。

「雲はいいや……どこにでも飛んでゆけて……」

去年の夏のことである。ここから二里の萩の城下に瓜を売りに行った。夏祭の宵であった。

そのとき整武隊の隊士たちが瓜を買ってくれた。

長州には、そのころいろんな隊があった。その中でも一番名が通っているのが奇兵隊で、奇兵隊を作ったのが高杉晋作。なんでも馬関の攘夷戦争のところに組みたてられた隊だということは、文平ならずとも長州の者ならみんな知っていた。

奇兵隊ができて士気が揚がると、続いて御楯隊というのができ、それから雨後の筍たけのこのように小さな隊が続々と作られたが、結局、これらは御楯隊と合併して整武隊となった。このほかにも遊撃隊だの鷹懲隊ようちやうたいだの、南園隊だのいろいろあった。

これらの隊には長州藩の者だけでなく土州脱藩の者や諸藩からの者も多かった——というところ甚だ奇妙にき

こえるが尊王攘夷、勤王倒幕という目的が一致している以上、そんなことはかまわんではないか、というところだったに違いない。

「おい、この瓜はなかなか美味いな」

皮のままかぶりついていた隊長らしいのがもぐもぐと口を動かしながら言った。

「貴様、いつもここに出ちよるのか」

「わしの弟が出てますんでね。わしはあまりこんなところ出るのは好かんのでね」

文平はずけずけと答え、そんなことよりも珍しそうに隊士たちの身なりに目をとめていた。

「ふん、どこから来ちよるンじゃ」

「ホケタ山の下からです」

その隊長らしい武士は顎の張った、どんぐり眼の、色の黒い、見るからに百姓面の男だったが、瓜のことだの、西瓜のことにくわしかった。

「お侍さんは、作物のことをよく知ってなさる」

と文平が言うと、ワハハ……と磊落らいらくに笑って、

「当り前じゃ、ここにいる連中はみんな百姓をしとったんだ」

と答えた。

「百姓を……？」

「そうじゃとも……藩の軽輩はな、百姓せにゃあ食っちゃいけないのだよ」

「ああ、そういうわけで……」

「軽輩でも侍のはしくれじゃが、諸隊には本当の百姓町人も居るでな。貴様もこんなところで、ぼやぼや瓜など売つとらんで侍にならんか……。世はまさに尊王攘夷の秋じゃぞ」

どんぐり眼が胸を張って大声で言うと、ほかの隊士も、そうじゃとも……と笑った。

まんざらからかわれているとも思えない。

文平は真顔になってたずねた。

「本当にわしらのような百姓の件でもお侍になれるんですか？」

「なれるとも……。現になつてゐる人は多い。高杉先生はなあ、これからは国民皆兵じゃと申されておる」

「なんですか……そのコクミンカイヘイというのは……」

「つまり一口に言うと、国を護るのは日本人みんなであけりゃいかなんということだ。今までは、戦争というと武士の仕事だった。国が興おころうが亡おこびようが、民百姓は知らん顔でいられた」

「それでもございせんよ。戦争に敗ければ家は焼かれるし、畑は荒らされるし……」

「まあ聞け……。だが、それは日本人どうしの時のことだ。これからは外国人が対あいて手だ。刀や槍をふりまわして戦争する時代ではなくなった。大砲や鉄砲の時代だ。とするとだな……」

どんぐり眼は、そこでまた瓜を一つとりあげてかぶりついた。

「武士だけが戦争する時代ではなくなった。つまり士農、工、商、みんなが力を併あわせて戦う時代なのだ。これ即ち国民皆兵というもんだ。ああ、こらあいかな、すっかり高杉さんのうけ売りになつてしまふた」

どんぐり眼は笑つて続けた。

「馬関戦争の敗戦で高杉先生はそう考えられたのだな。名だたる大将が、一兵卒の鉛玉でころりと死ぬのだからな……」

「では、わしらでも侍になれるので……」

「それはなれる。なれるが……」

「が……？」

「いきなりわれわれの隊にというわけには参らん。やはりものには順序があつてな、百姓町人は、それらを

集めて教育する隊がある」

「それはそれでございましょう」

文平は、俺もなんとかしてこの仲間に入ってみたいもんだ、と思った。

夏が過ぎて、秋がきた。

だが、文平の侍になりたいという望みは、日が経つにつれて強く、濃いものとなっていた。

第一、奇兵隊や整武隊の隊士のスタイルというのがいい。

陣羽織仕立ての白地の羽織——それへ「尊王攘夷」だとか「赤心報国」といった文字を肉ぶとに書いている。袴は荒い縞目のを短か目にはいて、大小は古代の後藤の細工の縁頭ふちがしらというようなきらびやかな金具はわざと除いて質朴剛健しつぽくこうけんに真鍮しんちゆうの縁頭ふちがしら、鎧よろいをつけ、朱鞘しゆさふに、柄は白の小倉でつくり、しかも非常な長刀。髪は剃らずに総髪を自製の紐で束ねて、眼が吊り上るほどに結っている。

この勇壮な姿が、文平の心を捉えてはなさない。

それまではお侍はお侍、百姓の子などがしゃちほこ立ちしたってなれる筈がないと、雲の上のことのように思っていたのが、手を伸ばせば届くところにあると

聞いてはじっとしてられないのだ。

「お父つつあん、俺あ侍になりたいんだ。許してくれろな」

萩から帰って三日目の晩、親父の文左衛門の前に出て頼んだが、

「この馬鹿野郎！　なんてことを考えやがる。剣術のケの字も知らねえ奴が、侍などになれるものかい」と一喝された。

「それが、お父つつあん、違うんだよ」

文平は三日前にどんぐり眼から聞かされた話をうけ売りして、

「これからの戦争は大砲に、鉄砲だ。もう槍や刀は古いんだ。ヤットーができなくなつて侍にやあ、差しかえないんだ」

「馬鹿たれが……槍や刀が要らねえのなら京都の騒ぎはどうなんだ。お前も忘れめえ。京都の三条小橋の池田屋というところで、長州藩の立派なお侍がたが多勢、新選組というのに斬られなさった。その噂が、お城下に伝わったときは大へんな騒ぎだったじゃないか……あれだつて槍や刀の戦だ。まさか大砲をぶちこんだわけじゃあるまい」

「そりゃあ、刀だ。……だが、そのあとの蛤御門はまぐりごもんのときは大砲と鉄砲の戦いだったんだぜ」

「いけないよ。百姓の子は百姓だ。大地主というわけにゃあいかないが、食うにゃあ困らないだけの田畑が、御先祖さまから伝わっている。おとなしくしてりゃあ、お前があとつぎだ。弟の文吉には少々分けて、分家させればいいんだ。第一、お島をどうするつもりだ」

頭から反対されて、文平は怏怏わうわうとして楽しまない日が続いている。

お島はことし十六。田舎には稀れな美しい娘で、いくら野良で働いても、その肌の白さが日焼けをしないというのが徳な性分だった。

「よう、お島。このごろすっかり尻に肉がついてふっくらしたでないかい。婿の話が決まると結構いろっばくなるもんだな」

村の若い連中がからかうと、

「ばかッ！」

泥田の泥をびしゃりと叩きつける気丈さだが、文平には弱かった。

文平、馬面で茫洋ぼうようとつかみどころのない、決して美男子でも好男子でもないが、その人の好きがお島の心をしっかりと掴んでいるのかも知れない。文平、お島より二つ上の十八歳。文平の親父の文左衛門とお島のお袋のおもとは来年は一しよにさせて、家督かどくを譲ろうなどと語り合って、内しよで愉しみにしていた。というのも二人ともに片親育ちで、その不憫みづみづさから眼の中に入れても痛くないという甘やかし方だったからだ。

「文平さーん……文平さんたら……」

土手の上からお島が怒ったように呼んだ。

文平は、ようやく我にもどって、

「なんだあ、お島ちゃんかい」

のっそりと起き上った。その顔を見て、桜の幹にながれてあった馬ががっかりしてそっぽを向いた。

「また、あんた……」

お島は、勢いこんで土手をかけ降りて投げ出すよう

に文平の傍にどしんと坐って、

「お侍になりたいと考えていたんだろ」

「ううん、雲を見ていたんだ。雲になれたらなんぼええかな……って」



「嘘！」

見つめたお島の瞳にみるみる涙がふき上げてきて、  
「そんなにお侍になりたいのかい？ あたしが嫌いな  
の？」

「そんな……」

そんな筈はないじゃないか、お島ちゃん、俺あお前  
が大好きだ、と月夜なら言えるところだが、春の陽は  
うららか過ぎて文平は照れた。

「文平さんがお侍になったって、あたいはお侍の奥様  
なんぞにはとてもなれないし……」

「どうしてだよ」

「だって考えてごらんよ。百姓の娘がお武家の奥様に  
なったなんて話は聞いたこともない。かりになれたと  
したって窮屈で死にまうよ。いろんな習慣しきたりだって違  
うし……」

「そりゃあ、わしだって同じだよ。これからいろんな  
ことを覚えていかなくちゃならんのだし……」

「だって後とりの文平さんが侍にならなくったって……  
お侍になれば戦争にもいかなくっちゃならないんだ  
し……」

「だがね、お島ちゃん。人間と生れて出世をしようと

考えることは悪いことじゃない。士農工商といって、  
侍は一番上の位だろう。今までは武士の家に生れなけ  
ればお侍なんてなれなかったが、いまは違うんだよ。  
望みさえすれば……手を伸ばしさえすれば叶えられる  
んだ。侍になったからって必ず危い目に遭うなんてこ  
たあないよ。ね、わかっておくれよ。とにかく、今こ  
のときを外したらわしの永い夢は消えてしまいうんだ  
よ」

「……」

「わしはなあ、……お島ちゃんに黙っていたがこの  
間、萩の城下へ行ってみた。そしたらね、浩武隊こうぶたいとい  
う隊で隊士を募集してたんだよ。その隊はね、生れつ  
きのお武家は軍監ぐんかん（隊長）だとか、書記（参謀）だとか  
上の人をのぞくと全員が百姓、町人だということだ  
った。だからこの隊なら大丈夫だよ。いきなり危いと  
ころに押し出される筈もなし……ね、男としての夢を  
一度だけでいいから叶えさせておくれよ」

お島は涙で洗ったように濡らした顔をあげて、

「わかったよ、文平さん」

と一こと言った。

「女には女の夢があるように、男には男の夢があるん

だねえ。わるかったよ。もうあたいは止めない。でも、お父つつあんは……」

「親父にやあ、黙ってゆく。もしも訊ねられたら家督は文吉に譲ってくれ、とわしが言ったと伝えておくれ」  
「……」

「だがな、お島ちゃん。わしはきつとお前を迎えにくる。刀を差して、鬚まげを結ってきつと迎えにくる。待っていておくれ」

文平はやつと晴々しい顔になった。

「で、出発は？」

「早いがいい。今夜にする」

「見送るよ。五ツ半（午後九時）、鎮守ちんじゆのお社にきておくれね。あたいが死ぬ思いで文平さんの望みをきいたんだもの……こんどはお前が聞く番だよ。鎮守さまに夫婦の誓いを立ててから行くんなら行っておくれ」

間もなく長州征伐が始まった。文平の浩武隊は大島郡に派遣されたが、まだ訓練も殆どどこしてない百姓町人部隊を第一線に出すはずもなく、常に後方勤務だった。

危くはないが、同時に華々しさもなかった。文平は

すっかり腐ってしまった。

「侍になったというものの兵站部へいたんの握り飯づくりじや、いつまでたってもうだつが上らない。第一、武士らしい苗氏みょうじすらがまだついていないんじやあ、お島に便りすら出せやしない」

うつうつとしていると、同じ思いの仲間もあった。直吉という隣村からやはり侍志願をしてきていたのが、

「どうだい文平、いっそのこと他の隊にくらがえといこうじゃないか」

と相談をもちかけてきた。

直吉は文平より一つ下の十七だが、役者のようにいい顔をしていて、見よう見まねのヤットーぐらいはやったことがあるという。女にもてるところから、年は下でも文平よりははるかにませていて、目から鼻に抜けるといった型の利口さを身につけていた。

やがて長州征伐は終わった。

形の上では長州は幕府に屈伏して、恭順きやうじゆんを誓ったが、内心では何をたくらんでいるかわからない、というのがこの頃の状態であった。

それはさて置き、文平はいよいよ別の隊に移ること

に決めた。

「ところで、どの隊がいいかな」

直吉にいわれて、文平はどんぐり眼の隊士のことを  
想い浮べた。

「そうだ、整武隊ではどうだ」

「整武隊か……」

直吉はうかぬ顔をして、

「お主、整武隊のことを知っているのか？」

「くわしくは知らんが……」

夏の日の瓜を喰った隊士の話をして聞かせると、直  
吉は腹を抱えて笑いだした。

「あの隊はなあ……お主」

と直吉は言った。

「大部分が根っからの侍じゃ、国民皆兵という呼びか  
けで、百姓町人から兵隊を採用しているが、これはつ  
まり兵士の数が足りんからじゃよ。武士たる者が、な  
んで昨日今日採用した者の風下につけるものか……。  
そこで百姓町人隊は、百姓町人で固め、武士隊は武士  
で固めているのだ。整武隊が、羽ぶりがいいのは、も  
ともとが武家出身で固めているからだぞ。そこへなぞ  
移ってみろ、それこそき使われて、拳に握り飯の火

ぶくれをつくるようなことではすまんぞ。お主はまっ  
たく人がいいからなあ……」

「なるほど……」

文平は長い馬面をつるりとなでて、のんびりとした  
口調くちようで言った。

「なるほどそうかも知れんな。だが、わしらはもともと  
と百姓じゃ。百姓が、最初っからお武家と同じにゆこ  
うというのは間違っとりやせんかい。わしやあなあ……  
最初は握り飯づくりでも、肥汲みでもなんでもする  
つもりだよ。その代り、いつまでもみんなから馬鹿に  
されて、へいこらしてる平隊士ひらうちでは居らんつもりじ  
ゃ。浩武隊もええが、あまり住み心地がようてな。そ  
れに隊が小さすぎる。やっぱり大きな隊に入って、華  
しく働けるところへ出んとな。出世もできん。わし  
は一人でも行くぞい。皆の中で、わしに賛成な者は居  
らんかい」

このとき文平に従って行を共にしようと手を挙げた  
者が五人——和助、佐太郎、辰次、文治郎、伍兵衛。  
そこで直吉も、一番あとからそっと手を挙げて、

「文さん、俺もいくぜ」



移籍などということは、簡単なものだろうと多寡<sup>たか</sup>をくくっていたのは間違いだった。

整武隊本部に一同首を揃えて出頭すると、

「松本書記殿よりお訊ねがある。そのまま、そこに差し控えておれ」

と言ひ渡された。

おやおや面接試験があるのかい、と顔を見合せて、待つこと約一時間。

一同は松本提山の部屋に通された。

書記といえはいまの参謀である。ここで入隊かどうかが決まるかと恐る恐る入って頭を下げ、顔をあげて見て文平は愕いた。

瓜をかじったどんぐり眼が悠然として正面の椅子に腰を下していたからで、

「おっ、あんたは……」

思わず声を出すと、

「ひかえろ！」

と傍の隊士が叱った。

提山は、

「叱るな」

と隊士を押えて、

「あの時の瓜はうまかったぞ」

と笑った。気がほぐれたような、すかされたような妙な気持だった。

「文平とかいうのはお前だな」

「へい」

「へいではない。武士らしくはいと答えろ」

「はい」

「なんでまた本隊に入隊を志願してきた？」

「浩武隊にいたんでは、うだつが上りません」

その言葉を聞くと提山、傍の隊士を見てにやりとした。

「その浩武隊に入ったのは？」

「侍になりたかったんで……」

「なぜ侍になりたい？」

提山はたたみこんだ。

「お国のためにつくしたくて……と申すべきでしょうが、本当は侍になって人間らしい気持になりたかったんですよ。わしら百姓は、こんな時でもなけりゃあ刀を差す身分にはなれません。攘夷とかいう側にまわれば、入隊できて侍になれると聞いたもんでね」

「刀を差してどうするといふのだ」

「威張れますよ」

くすつ……と提山は苦笑した。それからきつとなつて「この隊の隊規はほかの隊と違って難しいぞ。入隊のときに親子の縁を切ることになっている。而して軍功をたてねば、再びわが家へは帰ることを許さぬ、とあるが、承知か。いまならば帰つてもよいが、後では間に合わぬ。よく考えて返答するがよい」

「もう、親子の縁は切つて参りましたよ」

と文平は言った。

「ほう……」

提山は、文平がだんだん気に入ってきた。そこで言った。

「隊規に背けば切腹だぞ。腹が切れるか？」

「さあそいつはまだやったことがないからわかりませんが……そのときは教えて戴きます。だがいくら百姓でも腹を切れば赤い血が出るし、痛いから、なるべく切らないようにしますよ」

「面白い。お前が百姓の出なら、拙者は坊主の出だ」

「ヘッ？」

「松本というところに通心寺という寺があろう、拙者は元はその坊主だ。やはり腹を切れば赤い血が出る

体だ。うまくやれ」

うまくいった——文平はにっと笑つて、

「ところで、こいつらも私と一しょに來ました、同じ志の奴です。私に免じて一しょに入隊させて下さいまし。お役に立ちますよ」

「こいつめ……横着な奴だ」  
おうちやく

提山は笑つて頷いた。

「書記どの、この者らの送り状は……？」

「おそらく持参してまいな」

提山は言った。送り状というのは入隊に必要な身分証明書のようなものである。

「何です？ その送り状というのは……？」

隊士が説明すると、文平はその馬面をぴしやりと叩いた。

「これが、送り状ですよ。一枚の紙つきれなんかよ、生命のかかったこの首の方がよっぽど確かな送り状だね」

提山はとうとう声をたてて笑い出した。

「こんな奴だよ、この瓜売りは……。おい、お前に苗氏をつけてやろう。瓜売文平はどうだ」

ウリウリブンペイ——いい名だ、と文平は思った。